

【小西茂木氏生誕 100 年記念】

会報担当 遠藤 和彦

淡水大魚研究会の初代会長である故・小西茂木氏が生まれたのは、明治 41 年 5 月 29 日。もしご生存されていたとしたら、今年で満 100 歳になられます。今年には会創設者の生誕 100 年を記念し、氏の功績を再認識してみたいと思います。



氏は本名・小西茂樹（こにししげき）。多くの鯉釣り師たちを虜（とりこ）にした名著「淡水大魚釣り 全」の著者紹介を見ると、和歌山県の紀ノ川支流の岸に生まれ、海村、漁港に住み、少年時代より魚を友とした、記載されている。

昭和 32 年 10 月 3 日、氏のレンジョ釣りの模様を雑誌社が取材

- - - これを機に釣りの執筆を開始する（小西光紀会員談）

昭和 40 年、「淡水大魚研究会」が発足する。

昭和 43 年 5 月 1 日、「淡水大魚釣り 全」が発行される。

昭和 46 年 4 月 30 日、会報第 1 号が発行される。

平成 4 年 3 月 15 日、体調不良につき、会長を辞任し、顧問へ就任

平成 4 年 4 月 9 日、小西茂木顧問、逝去 享年 84 歳

日本国内の 50～60 歳ぐらいのコイ釣りマニアの方で、氏の著書「淡水大魚釣り全」を読んでコイ釣りにのめり込んで行った人は少なくないと思う。もちろん、かく言う私もそのひとりである。氏のコイ釣り理論は、従来の言い伝え的・観念的なコイ釣りとは違い、科学的根拠に基づくもので、読んでいて理路整然としていて納得の行くものであった。

投餌
目標を定める



投餌
竿のバネを利用して投餌



投餌 徐々にスプールに
ブレーキをかけて着水



コイは「1日1寸」といい、何日も同じ場所に通ってエサをまき、飼い付けのようにしないと釣れないといわれていた時代に投餌音で寄せて、Y字ハリスでバレを大幅に改善した釣法は、従来の受動的な“待ち”のコイ釣りスタイルをブラックバス釣りのような“攻め”の能動的な釣りへと大きく変化させるもので瞬く間に多くのコイ釣り師たちを虜にしてしまった。

投餌音でコイを寄せることについては、その信憑性について今日でもなお賛否両論があるが、毎回同一場所で投げ続けていれば、音とエサに連動した条件反射は起こり得る。ちょうど養魚場のコイへ投餌時に岸を棒で叩いていると、次に棒で岸を叩くとコイはエサがあると理解して、寄ってくる。

しかし、氏の理論による投餌音は、投餌時にやんわりとエサ玉を水面に落とすことにより、コイの好きな低周波音を発生させ、コイの好奇心をそそり、集魚するというものであった。

この投餌音の効果については、私自身今でも再現実験をしてみたいと思っている。将来への課題としておきたい。

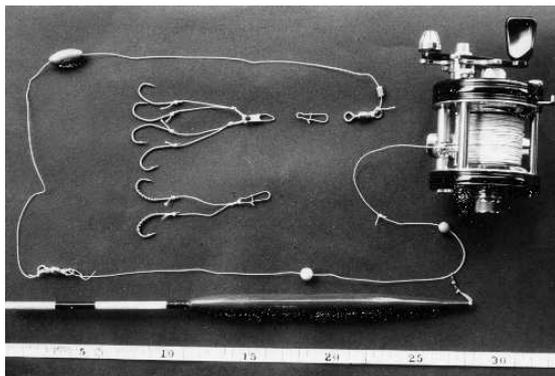
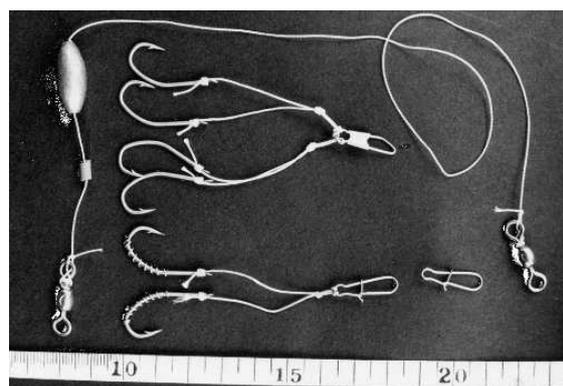
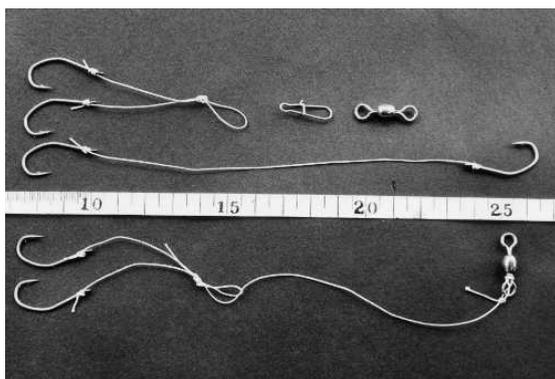
氏は投餌音の理論付けほか、サオ、リール、ミチイト、ハリなどすべて理論的に整理されたこと

は、今日のコイ釣りの基礎を氏が確立したと言っても過言ではない。

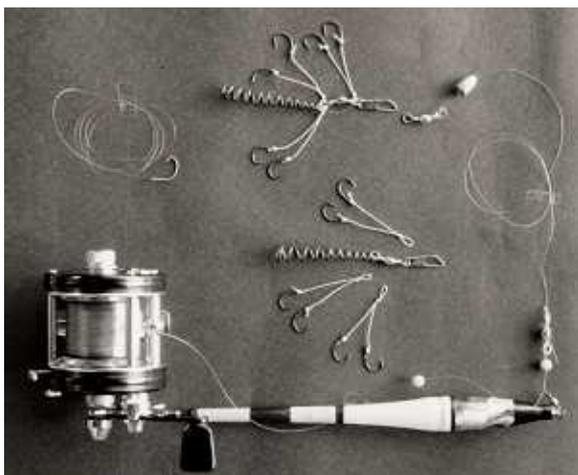
エサについても、サナギから養魚・養鶏用の飼料を製造されていた小口油肥

社の依頼で、氏の理論に基づいた「大ごい」、その後「五大魚」の開発にも携わ

っている。時間的に前後するが氏は、昭和40年、淡水大魚研究会を発足した。この「淡水大魚」という用語は、氏のオリジナルである。会は多くの傑出したコイ釣り師を輩出した。今日のコイ釣り雑誌によく登場されるコイ釣り師やそのまた師といわれる人もかつて淡水大魚研究会の門を叩いている。氏は、月例釣行会を主催する一方、昭和40年10月から同48年7月まで「月刊 つりマガ」へ【カメラ行脚】を執筆し、全国各地の釣り場や釣りに関わる出来事などを紹介したり、昭和46年4月30日第1号から平成5年6月第235号まで淡水大魚研究会会報を発行するなど、氏の痩せ型の体軀からは想像も出来ぬほど精力的に活動されている。



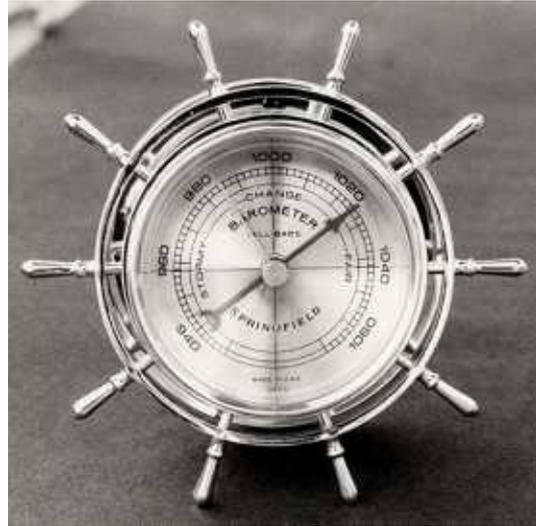
小西式Y字ハリスの出現は、それまでコイ釣りといえば、吸込み式かクワセ1本針と考えていた多くのコイ釣り師たちにとって相当に新鮮だったに違いない。Y字ハリス長は、短すぎればエラブタにかからず、長すぎれば腹部や胸に刺さり致命傷となってしまうために5cmとしてある。



左のようなラセンは、今回小西光紀会員から、氏のアルバムをお借りして写真を見ている中で初めて目にするものであった。

著書には一度も掲載されていないので、きっと試作品で終わってしまったのであろうと思われる。

右の気圧計は、氏が釣行時に常時携帯していたもので、気圧の変化が釣果にどう影響するか、どこがポイントになるかなど、日常の研究心の旺盛さがうかがわれる。



「図解早わかり 投餌音で寄せる野ゴイ釣り」

あとがきから抜粋



大物にめぐり会う日は、すぐには来ない。急がずに時機を待つのだ。心をこめてエサを打ち続けていれば、突如として電撃のような一瞬がおそいかかってくる。そして、波のおさまった水面に、感動にみちあふれた満足感が静かにひろがってゆく。

本書で述べたのは、最新の基本的釣技である。基本はつまり、出発点にすぎない。ゴールははるか、かなたなのだ。野ゴイ釣りほど幅が広く、奥行き深い

ものはないと、つくづく思う。野ゴイは賢い。ぜひ大物をと狙って幾日かよい続けても、ぴくりともあたらない。が、時には、軽く振り出したサオに、たまげるほどの大物がかかるのだ。

野ゴイを友として、気がつかぬ間に半生を過ごしてしまったが、知りたいこ

とが、なお少なくない。野ゴイ、野生のコイとは、すなわち自然そのものなのだ。それほど野ゴイの釣趣は深い。前にも書いたとおり、野ゴイ釣りの神髄に少しでもふれたなら、もうおしまいだ。いのちある限りやめられなくなってしまうのである。

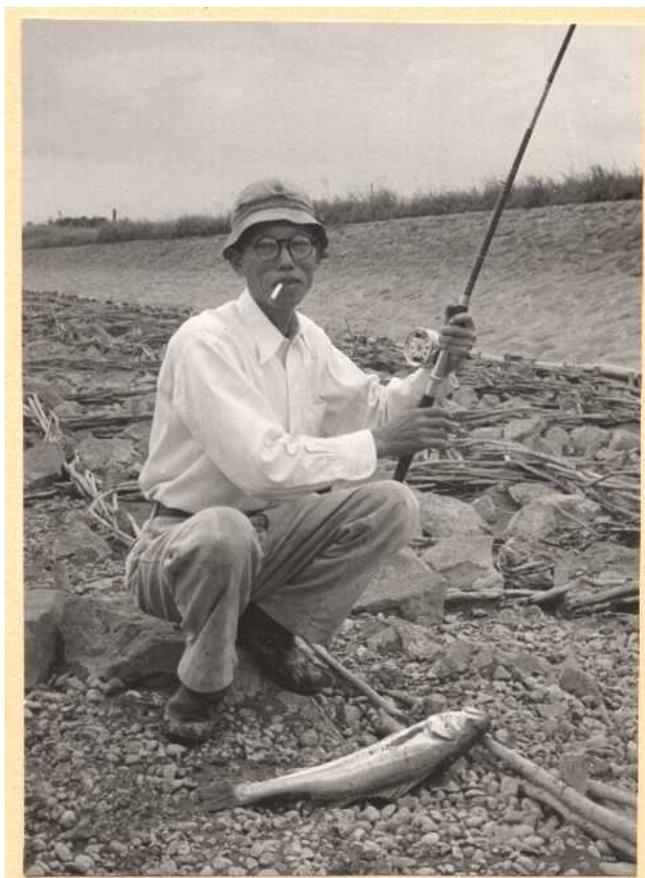
著者

氏と私が出会ったのは、氏が80歳の頃に「もうだいぶ体力が落ちてきた。あと2年くらい早くお会いしていれば、もっといろいろな釣り場や釣法を教えられたのに」と言われたのを覚えている。しかし、文字通りご老体に鞭打って、横利根川をベースとして、利根川や北浦のポイントへの釣行に同行し、いろいろと教えていただいた。

ある日、自宅の玄関で転んで大腿骨を骨折し、入院。その後肺炎が悪化し、還らぬ人となった。

氏の創設された淡水大魚研究会は、その志を受け継いだ多くの会員によって連綿と運営されている。今日多くの楽しみを与えてくれるこの会および氏の功績にあらためて感謝したい。

最後に、今回多くの資料を提供していただいた小西茂木初代会長のご長男であります小西光紀会員に心よりお礼申し上げます。



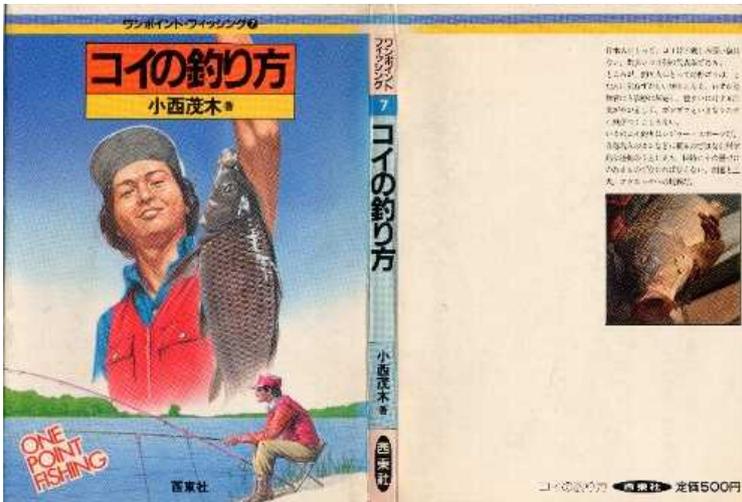
編集室・遠藤和彦

【小西茂木氏 著書】



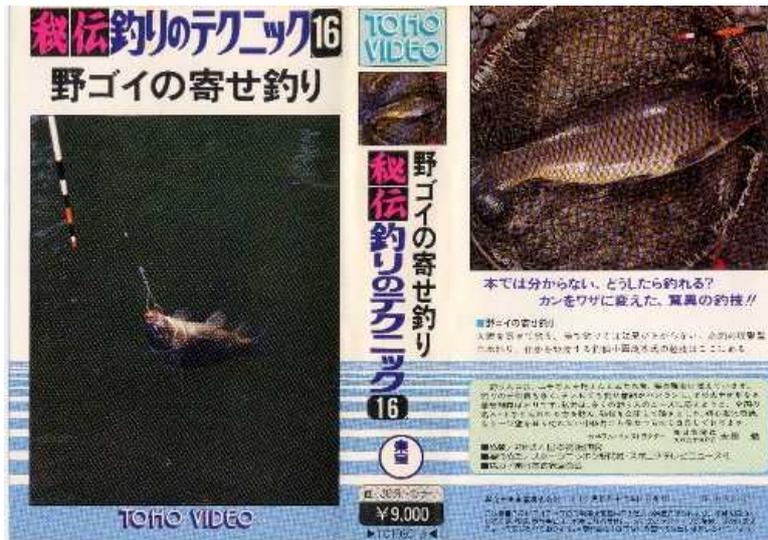
【淡水大魚釣り】

昭和 43 年 5 月 1 日発行



【鯉の釣り方】

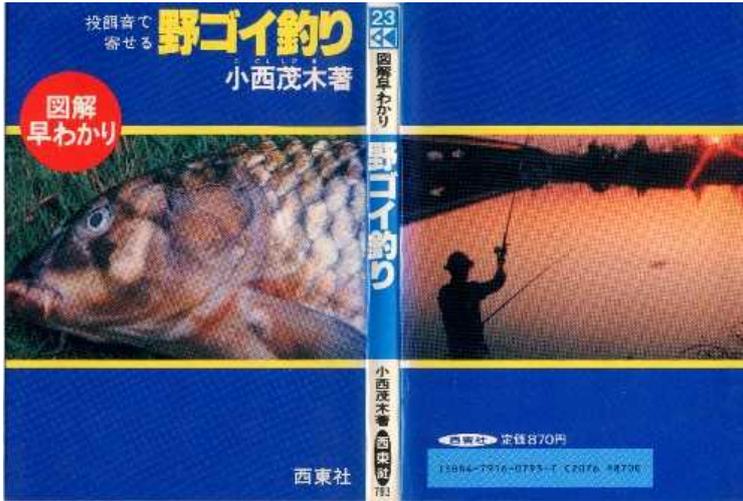
昭和 56 年 4 月 20 日発行



VTR

【野ゴイの寄せ釣り】

昭和 59 年 8 月 10 日発売



【野ゴイ釣り】

昭和61年3月1日発行